

イチバ・ニーバ・サンバ

三 春

2023年の秋、学科限定の同窓会に初めて参加した。

懇親会の前に名誉教授（なんと後輩！）の講演会が設けられていた。「ウクライナ侵攻から再考するロシアのアイデンティティー形成」という演題に惹かれたのか、コロナの閉塞感が緩んだせいか、聴講者が殺到した。我々は11期生、卒業してから半世紀が過ぎた。

開講一番、文字ぎっしりの映像が現れた。地図も写真もない数十枚のスライドは間違いなく聴衆泣かせだ。教授は「ロシアに幻滅した者のために語りたい」と、ロシアの宗教・言語・歴史・文化・民族性を2時間かけて熱く読みあげた。純粹培養の学者先生は研究者としては優秀なのだろうが、教育者や指導者としてはいかがなものか。

眠気と空腹と忍耐力が限界に達した頃に講演終了。腰痛をこらえつつ懇親会場に移動する。料理はなかなかの豪華版だ。だが、ここでも同窓会長や役員の挨拶、教授陣の紹介、乾杯役の長広舌……「おあずけ」効果で唾液腺はフル稼働している。

周囲は見知らぬ人ばかりで長老派の現実が身に沁みる。なんとか見覚えのある名を探し出し、前後3期分で10人足らずの高齢者たちが大会場の片隅で立ち話。名札を見なければ誰が誰やらわからないが5分もすれば昔の顔になる。嘗ての人気者の消息を知らせあう、故人となった者を惜しむ、憧れの先輩が来ていないとイチバ（吉婆）が嘆く、一番賑やかなのは、真っ赤な爪と口紅の老女史ポドスターヴィナに落第させられた通称ゴメさんだ。

我々は70年安保の嵐が吹き荒れた大学バリケード世代である。死者も出た。退学させられた者や自ら去った者たちは二度と母校の土を踏もうとしなかった。どうにか卒業し就職しても3日目には喧嘩退職を繰り返す猛者もいて、考え方も性格も行動も一風変わったヘソ曲がりが多かった。

午後8時過ぎ。次も元気で会おうねと口々に言いながら解散する。でも、次はないなあとサンバ（参婆）は密かに思う。

別れ際にニーバ（忒婆）が呟いた —— 最初で最後の同窓会……だね。